

「あとはお茶を淹れるだけだから。もう少し待つてて」  
私はハロを抱きかえたまま部屋に入り、ベランダに出た。  
青々と茂るシソの葉やブチトマト、そしてセロリのプランタ  
ーが並んでいて、雲ひとつない快晴の空に向かって葉を伸ば  
している。絶好のピクニック日和だ。  
今日のデートは私からのリクエストだ。透と会うとき、い  
つもハロが置いてきぼりになるのが気になる、という話をし  
たのがきっかけで、「ハロも一緒に楽しめるデートをしたい提  
案したのだ。透は「友人に世話を頼んでいるから大丈夫」と  
言ってくれたけれど、透のことを世界で一番愛しているハロ  
から透を奪ってひとり占めしてしまうのは良心が咎めるのだ。  
そう言ったら透は、  
「そんなこと言つて、本当はハロに会いたいただけだろ？」  
と、見透かしたように笑った。

まあ、半分は凶星だ。

そんな話をしていた矢先に、透がドッグランがあるサーービスエリアを見つけてくれ、ドライブがてら2人と1匹でのデートという事になった。サンドイッチのお弁当を作つて欲しいとお願ひしたのは私だ。予想以上で、出発する前からお屋が待ち遠しくてしょうがない。

「お待ちせ、用意できたよ！」

キッチンから透が呼んでいる。窓を閉めて部屋に戻ると、ハロは私の腕から飛び降りて透の元に走つて行つた。いろいろな荷物が用意してある。サンドイッチのバスケットといろいろな手袋。透はそれらを手際よくリュックに詰め込んで、ファスナーを閉めた。

「もう出れるの？」

「大丈夫だよ」

透はハロを玄関に呼ぶと、首輪にリードをつけて最後の支度をした。私は鞆を肩にかけ直して、バスケットを持ち上げようとする。

ところが、透は手を伸ばしてそれをさえぎった。

「ちよっと待って」

「何？ これくらい私が持つよ」

「そうじゃなくて、先にあることがあるだろう」

「え？ 何？」

と、何のまえふりもなく透は私を抱きしめた。まるで、私がハロをぎゅっと抱きかかえたように。

「……もしかして、ハロにやきもちやいたの？」

「おかしい？」

「おかしいよ、だって相手は犬だよ」

「でもあいつは雄だ」

何でもスマートにこなす透がまさか犬に嫉妬するだなんて

「外過ぎて、私は思わず、透の髪をくしゃくしゃに撫で回した。透にもこんなにかわいい一面があつたなんて、それを知れただけでも今日のデートの、意味はあつたというもののだ。」

芯が強くてさらさらの金髪は、思い切りかき乱してもあつという間に元に戻るから遠慮は、はしない。透が我慢できずに笑いい出すまでそうしてあげたら、透はやつと腕の力を緩めてくれた。

「他にもまだあるでしょ？」

「何？」

透は赤い舌を見せ、ハロが私の口を舐めたようなキスをした。思わず体をのけ反らせただけけれど、透は私の顎を捕えて逃がさなかつた。息が切れるまでそうした後、透は満足げににんまりと笑つた。

「ごちそうさま」

透は床に落ちた鞆を拾い上げながら言った。  
「ごめん、つい夢中になっちゃった。早く来すぎた？」  
「いや、もう大体準備できてるよ」  
ハロの興奮がおさまらないので、私はハロを抱き上げて部屋の上がる。  
その瞬間、思わず大きな声を上げてしまった。  
「わぁー！きれいだ！」  
ダイニソングテラブルに素晴らしい景色が広がっていた。白赤、黄、鮮やかな緑がバスタークトの中を埋め尽くして、まるでお花畑のようだ。ボアロでも評判だという透のお手製サンポイントだ。  
「大変だったでしょ？　ありがとうね」  
「ちよつと作りすぎだよ。食べきれぬかな」  
「大丈夫、ちゃんとお腹すかせてきたから」

透は聲やめに笑った。

私はなんとかそれを受け止めることに成功した。扉を開けた瞬間、廊下の向こうから白い弾丸が飛んできて「ハロ。久しぶりだね、元気だった？」ハロは尻尾をぶんぶん振りながら、返事をするようにひと声吠えた。うんと背伸びをしてじゃれてくるのがなんとも言えずじらしくて、私は三和土に膝をついてハロを抱きしめる。Kaate、Spadeのバッグが床に落ちて汚れてしまっただけれど、こんなにかわいいうつハロのためなら仕方がない。ハロは私の顔を冷たい舌でぺろと舐め回した。犬が人の顔や口を舐めるのは愛情表現のひとつだ。飼う主でもない私にこんなに甘えてくれるなんて嬉しすぎて、甘い気持ちで胸がいっぱいになる。ハロと戯れるのに夢中になっていた私は、透がすくそばに立っていることにしばらく気づけなかった。「いつまでそうしているの？」



魔法ビズケット 5周年企画SS

あ か ぜ  
2019.7.1  
[@mahoubiscuit](http://cherrywind.ciao.jp/mc/twiter)